



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 渋 沢 栄 一

### まえがき

明治維新によって成立した新政府は、私企業の手で日本の工業化を達成する基本方針を打ち出した。そして、この方針を広く国民、とくに工業化を推進する企業主体となるのにふさわしい商人、資産家たちに伝えることにつとめた。10

しかし、政府の指導者やスポークスマンだけで、国民の意識を工業化に向けて方向づけることはできなかった。伝統的因襲にとらわれ、新時代の経済環境を理解することのできない商人、富豪たちに工業化のための会社設立を呼びかけるには力不足であった。民間にある有識者たちが、政府に協力して、工業化に向けての啓蒙と動機づけの役割を果たすことになった。15

識者の中でも、その影響力において抜群だったのが、渋沢栄一と福沢諭吉であった。二人は、経歴も、職業も、思想的立場も異なっていたけれども、いずれも、日本の独立と富国強兵のために工業化が不可欠の課題であること、しかし、工業化の推進力となるべき企業主体の育成があまりにも立ち遅れていることを痛感していた。そして、この二人は、それぞれの手段を通じて工業化のための企業活動を促進することにつとめ、顕著な成果を収めたのである。20

以下、渋沢栄一の行動と思想を、時折り福沢諭吉のそれらと対比しながら描き出してみる。福沢について十分説明する余裕はないので、福沢の著書「実業論」の一部を資料として最後に添えておくに止める。25

---

このケースは、森川英正教授がクラス討議の基礎資料として作成したものであり、経営上の適切もしくは不適切な状況処理を例示しようとするものではない。なお、ケース中の固有名詞は偽装されている。（1990年4月作成）